

# 企業課題解決 生徒が提案

## 職場体験と起業家教育融合

札幌市立月寒中学校（太田和幸校長）は、生徒が多様な大人と関わりながら社会を学ぶキャリア教育を本格化させている。本年度、職場体験に協力した企業・自治体は計50社に上り、職場体験と起業家精神（アントレプレナーシップ）を融合させ、企業の課題解決を生徒が提案するカリキュラムを導入。生徒は校内外での対話をヒントに、企業側をうならせる発想を次々と生み出している。

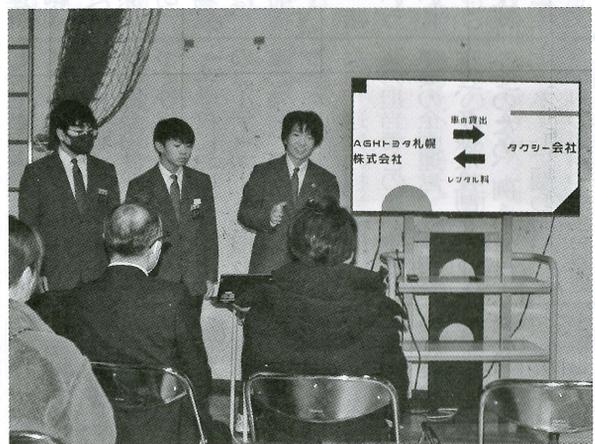
同校では、コロナ禍で職場体験の機会が減少し、協働力が企業とのつながりが一時弱まった。そこで教職員が企業の新規開拓に奔走。探究活動やキャリア教育を支援する（併すみか）の協力を得て、外部と関わる機会を意図的に増やしてきた。

職場体験先の振り分けに当たっては「情報に関心があがる」「学ぶのが好き」「アイデアが好き」「気持ちよく想像できる」など、生徒の特性や関心に基づき5つのグループに編成。生徒は自らの志向に合うグループを

AGHトヨタ（株）月寒店を訪問したグループは、キックルームやドリリンクコーナー、試乗での快適な乗り心地に感動。「トヨタの魅力が、貴重な経験になった」と考え、試乗車を友だちと振り返った。

トヨタ会社に貸し出す「トヨタクシー」を提案した。同社からは「新しい発想の視点を待た」と評価され、生徒たちはガッツポーズ。塚田一翔さんは「車が中学生に新聞を読んでもらうために必要とされる場所はどこかを考え、地域に密着した企画にすることを意識した。発表直前まで課題がないかを確認し緊張した」と振り返った。

井野さんは「課題解決には、ゴールから逆算して考えることが大切だと分かった。友人や家族、先生など様々な人と関わらなければ、外から俯瞰することはない」と語った。



職場体験先の企業関係者を前に、課題解決案をプレゼンテーションする生徒

同校は宿泊学習や修学旅行先の学校との交流も計画し、教育活動のあらゆる場面で外部との接点を設けている。担当する野呂遼詩教諭は「生徒の考えを広げるには、まず選択肢を広げる場を用意する必要がある」と話し、太田校長も「教育環境を学校の内側だけにとどめず、外の力を借りることとは教員にとっても学びになるのでは」と期待を寄せた。